

私に舞い降りた救いの一言

新潟県新潟市立鳥屋野中学校

三年 遠山 美帆

私は、生まれてから十五年間、とても多くのことから「ちから」をもらって、過ごしてきました。たとえば、小学校に入学してからずっと同じ場所を歩いている通学路。そこは、車はもちろん、人通りも少なく、街灯も片手で数えられるくらいしかありません。要するに、不審者や変質者が出やすいところなのです。

そんな通学路には、毎日ある人たちが立っています。それは、通学路のまわりに住んでいる人たちです。信号や曲がり角など、私たちが事故を起こしてしまいそうなところで、蛍光色のジャケットを身にまとい、旗を持って立っているのです。毎日そこですれ違うたびに、

「おはよう！ 今日もいい天気だね！」

「おかえりなさい！ 一日お疲れさま！」
と、声をかけてくださいます。私にとって、とてもうれしくて、楽しい瞬間です。

しかし昔は、地域の人たちに声をかけられても、恥ずかしくて返事をするのができませんでした。「別に地域の人とは仲良くならなくてもいいや。」

と思っていたため、余計に返事がしづらかったのです。しかし、私はある一つの出来事から、地域の人

たちと仲良くなりはじめました。

それは、私が小学校三年生のときのある一日のことでした。私はその日、朝から体調があまりすぐれなくて、学校に行きたくありませんでした。しかし、毎日仕事で忙しい母に迷惑をかけたくない、という思いから、私はそれを我慢して学校に行くことにしました。

重い足取りで、ゆっくりと進み続ける中、お腹に痛みが出てきました。家に引き返そうか。でも母に迷惑がかかってしまう。そんな思いに頭を悩ませているうちに、やはり、お腹の痛みはどんどん強まり、私に容赦なく襲いかかってきました。そしてついに、私はお腹を抱えてその場にうずくまってしまったのです。

(辛いよ……。誰か助けて……。)

その時です。

「大丈夫？ どこか具合が悪いの？」

一人の女性が、私に声をかけてくださったのです。お腹が痛くて、家に戻ろうか迷っている、と伝えると、

「じゃあ、私が送ってあげるよ。自転車の後ろのカゴ、乗って！」

と言われました。いくら何でも申し訳ないと思い、一度は断ったのですが、

「具合が悪い時は誰かに頼るのが一番だよ。」

という言葉を聞いて、何だかとてもホッとしました。そして、何かが切れたように私は泣き出してしまいました。早く乗って、と言われて、私は小さくうなずき、自転車の後ろのカゴに乗りこみました。とても大きなカゴで、私が二人分入るくらい大きなものでした。自転車が動いている間、私は恥ずかしくて下を向いていましたが、その時の風の心地良さは今でも覚えています。

家の前で降りしてもらい、お礼を言うと、その女性にはかっと笑って、

「早くお母さんのところへ行っておいで。」

と言いました。私は家の中に入り、母にひと通り事情を説明し、学校を休むことにしました。母は女性にお礼を言おうと外へ出ました。すると、母は私に、

「その人、もういないよ。」

と言いました。びっくりしたけれど大きな声で毎日挨拶をしてくださる姿を思い出し、あの人らしいな、と思いました。

その次の日から、私は地域の人たちに挨拶が返せるようになりました。初めは小さい声だったけれど、少しずつ慣れていき、今では大きな声で挨拶ができるようになりました。

その女性は、私が辛い時に手を差し伸べてくれました。同時に、大きな「ちから」も与えてくれました。女性は今もたくさんのお子ともたちに、あのかかった笑顔で毎日声をかけてくださっています。私も大人になって、辛そうな人や困っている人を見つけたら、この女性のように手を差し伸べてあげられる人になりたいと思います。

その女性は、今日も大きいカゴがついた自転車に乗って、毎朝話しかけてくれます。

「おはよう！ 今日頑張れ！」